

海を詠う

岩井圭也

第四話

四月の夜、空に浮かんでいるのは朧月おぼろづきだった。

午後九時をまわり、街からは人氣が絶えている。街灯がいでうを頼りに歩くのは怖くないと言えば嘘だけれど、どこか浮かれてもいた。外出することは兄には伝えていない。言えば、十八の娘が夜道を出歩くな、と反対されるに決まっていた。革の鞆びんせんには、便箋が入っている。

先日、〈文芸レビュー〉第二号が刊行された。結局、わたしの翻訳は創刊号には間に合わず、第二号に掲載された。モルナルの「髪かみの黒い男の話」という短編小説の翻訳だった。誌面に左川千賀さがわちかの名が載っているのを見たときは、頭の芯しびが痺れた。これでようやく、わたしの文学がはじまった。

兄はあいかわらず、文学を実践しているようすがなかった。〈文芸レビュー〉の経営が大変らしく、広告料を集めたり、印刷所と金銭の交渉をしたりしている。貯金局の仕事も続けているから、相当に忙しそうだった。伊藤さんはぼつりぼつりと詩を書いている。ただし

『雪明りの路』とは全然違う作風で、上手くいっていいのだけど、わたしにはそうは思えなかった。

やがて、和田堀町のアパートに着いた。一階の角部屋を確認すると、窓ガラスからランプの光が漏れていた。よかった、まだ起きている。

玄関の鍵はかかっていたいなかった。静かに下駄を脱ぎ、足音を殺して廊下を進む。かち、かち、と時計の針がぎこちなく動いていた。ドアの前に立ち、拳を握りしめ、三度ノックをした。ぎよっとした顔で振り向く伊藤さんが、頭に浮かんだ。

「はい？」

室内から怪訝けげんそうな声が聞こえた。

「こんばんは。開けてくださらない？」

「……ちかちゃんか？」

こわごとと開けられたドアの隙間すきまに、からだを滑りこませる。伊藤さんは眉尻を下げ、口を一字に引き結んでいた。

「こんな時間になんだい」

「頼みたいことがあるんです」

部屋の勝手はわかっている。いつも使っている紫色の座布団に腰を下ろす。伊藤さんを見上げると、観念したように隣に座った。

「最近、新しい男友達が出来たんです」

「どこで知り合ったの」

「詩を書く人で、とっても優しいんです」

答えになっていないことはわかっている。両手に視線を落とす、指先をからめて遊ぶ。

「わたし、男友達に手紙を書きたいんですけど、いい文句が思い浮かばないんです。なにを書けば男の人が喜ぶのか、わからないから。伊藤さん、よければ口述してくださいませんか？」

「ちかちゃんの手紙を、ぼくが？」

「ええ。伊藤さんならわたしよりずっと手紙がうまいでしょうから。それとも、難しいですか？」

できるだけ挑発的に見えるよう、薄く笑ってみせる。内心、心臓は緊張で破裂はれっしそうだった。

伊藤さんは、わたしと交際する気がない。その事実が最初は悲しかったけれど、時が経つにつれてだんだんと心のなかで整理がいつてきた。こちらを向いていない相手なら、振り向かせればいい。このまま漫然まんぜんと過こしても、願じようじゆいが成就することは決してない。ならば失敗してもいいから、近くまで踏みこみたい。

突然の頼みに面食らいつつ、伊藤さんは「いいよ」と応じた。

「友達の手紙を考えたことなら、前にもある」

「それは頼もしい。口述してくださいましたら、わたしが書き取ります」

わが物顔で、持参した便箋びんせんを座卓の上に広げる。ペンとインクは最初から貸してもらうつもりだった。「どうぞ」と勧められたペンを握ると、手の脂あぶらのせいか少しだけ滑った。ペンの先は剣のようにとがっている。

「いつでもはじめてください」

促うながすと、伊藤さんは顎あごに手をあてて考えこんだ。そのままなかなか口を開こうとしない。わたしはことさら焦れたように「ねえ」と言う。

「まだですか？」

「急がせるなよ。相手がどんな人かもわからないんだから」

「手紙ならすぐ思いつくと思ったんですけど。詩と違って、ね」

最初、伊藤さんは疑わしそうに眉根を寄せていた。だがわたしの言葉の意味を理解すると、さつ、と顔が青白くなった。わたしは両手を固く組み合わせることで、どうにか指先の震えを隠した。

「ぼくには詩が書けない、と言いたいのか？」

「あら。そこまで言わないといけませんでしたか？」

伊藤さんの顔から、感情が脱色した。細めた目の内側でなにを考えているのかはわからない。ただ間違いないのは、いまこの瞬間、伊藤さんが見つめているのはわたしだけだということだった。

これでいい。血が出るくらいに鋭利えいりな視線で、わたしの心臓をえ

ぐり出してほしい。いつかの律ちゃんのお姉さんみたいに、殺意を向けてほしい。灰皿で殴ってくれても、首を絞めてくれてもいい。いちばん怖いのは、わたしのことなんて忘れてしまうことだ。それに比べれば、殺されるほうがよっぽどましだった。

「……詩なら書いている。来月、〈椎の木〉に新作を発表する」

「そうですか。でも、前に書いたみたいな詩ではないんでしょう？」

「抒情詩は捨てた」

身体の芯まで冷えるような声音だった。

「自然や風景を詠った詩はもう求められていない。いま新しいのは、精神分析をもとにした前衛詩だ」

「わたしは昔の詩のほうが好きですけど」

「ああ、と伊藤さんは大仰にため息をついた。

「今夜はいやに突っかかってくるね」

「思っていることを口にしただけです。ところで、手紙の文面はできましたか？」

「追い出されるかもしれない。そう思ったけれど、伊藤さんは腕を組んで、律義に口述をはじめた。存在しない男友達に宛てた手紙の文面を。」

「こんにちは。霞のかかった夜、月を見ながらこの手紙を書いていきます。四月になりました。故郷では、ようやく雪が融けてなくなるこ

ろです。いずれあなたにも北の地の情景を見せて差し上げたいです。
あなたは……」

淀みなかった語りが、急に止まった。伊藤さんは薄く瞼を開き、
瞳孔だけ動かしてわたしを見た。いたずらを仕掛ける少年のような、
こずるさが滲んでいた。

「あなたは、二番目に大切な男友達ですから」

伊藤さんが言った通りに書き取る。二番目、と書くとき、思わず口
が緩んだ。わたしへの意趣返しのもりだろうか。

「二番目に大切な、ってどういう意味ですか？」

「さあね」

「いちばんは誰なんです？」

無表情のまま、伊藤さんはふいとあちらを向いた。背筋がぞくぞ
くした。嫉妬しつとというにはささやかすぎる感情かもしれないが、それ
でもこの人は、姿の見えないわたしの男友達に不快さを覚えている。

伊藤さんの口述は、便箋一枚分でちょうど終わった。便箋を折り
たたみ、あらかじめ持ってきた封筒に入れ、切手を貼りつけた。伊藤
さんが窓の外を見ている隙に、すばやく宛名を書いた。

「おかげでいい手紙が書けました。ありがとうございます」

わたしは一抹の未練も見せず、部屋を後にする。ドアが閉まる間
際、「気をつけて」という声が追いかけてきた。

中野への帰り道、郵便受けに書簡しよかんを投じた。封筒の表に書いた宛先は、和田堀町の伊藤整だった。あの手紙を受け取った伊藤さんは、どんな顔をするか。まさか口述した手紙が、自分自身に届くとは思っていないだろう。

その瞬間を見届けることができないのが、残念だった。

大きな革靴を肩からさげた律ちゃんは、ちょうど門を抜け、ひとつ目の敷石しきいしを踏んだところだった。玄関扉を開けたわたしと目が合うなり、彼女の目も口も真ん丸になった。

「ちかちゃん？」

駆け寄りながら、わたしも「律ちゃん！」と叫ぶ。垂れさがった右手を両手で取り、上下に揺さぶる。律ちゃんはびっくりして固まっていたけど、すぐに「久しぶりじゃないの」と笑った。

「着ているものの感じが違うから、すぐにわからなかった」

わたしが身につけているのは、白い胸飾りのついた緑のブラウスと、紺色の短丈スカートたんたけだった。どちらももらいものの生地を使って、自分で縫った。和裁なら本別にいるときに教わっていたから、多少の洋裁はこなせた。

「やっぱり東京で手に入る洋服は洒落しやれているのね」

そう言われたのがうれしくて、自作であることは伏せた。ふふっ、

と笑うと、「笑い方まで都会の人みたい」と律ちゃんが目を輝かせた。玄関先で立ち話をしていると、話し声を聞きつけたのか、兄が現れた。先に気付いた律ちゃんが頭を下げた。

「昇^{のぼ}さん、お世話になります」

「長旅お疲れさま。くたびれているだろうから、部屋で休むといい」
律ちゃんは当面、中野町の兄の借家に下宿することになっていた。
わたしは律ちゃんを部屋に案内する。広くはないけれど、使いやすそうな和室だった。じゃあね、と去ろうとしたところで引き止められた。

「待って、ちかちゃん。話したいこと、たくさんあるから」

「いいの？ 疲れてるんじゃない」

「初めての部屋で、ひとりでも休めないもの」
迷ったけれど、わたしも久々に会う律ちゃんともっと話したかった。鞆の他にはなにもない部屋で、わたしたちはしばし、この一年について語った。

律ちゃんは、旭川の小学校で教員として勤務した。子どもと触れ合うことはそれなりに楽しかったけれど、画業への未練は捨てきれなかったそうだ。わたしと同様、家族とはそれなりに揉めたが、どうにか説得しおおせたという。

「昇さんやちかちゃんが上京してくれていたおかげ。知り合いがい

るならなんとかなるだろう、ってことで納得してくれた」

続いて近況を問われたわたしは、自室から〈文芸レビュー〉第二号を持つてきた。律ちゃんは目次を見て「すごい、すごい」と連呼していた。

「左川千賀っていうんだ。由来は？」

「なんとなく」

筆名の由来はさして追及されなかった。わたしは今後の計画も話した。五月に刊行される第三号には、モスコオ芸術座についての散文が掲載されることになっている。その後も月に一編、〈文芸レビュー〉に翻訳が載る予定だった。

編集補助の仕事もようやく与えられた。わたしは主に広告関係を担うことになり、広告主との郵便物のやり取りや、図版の確認をやることになった。最初言われていた会計の雑務も、ちょこちょこ手伝うようになっていた。

「すごいねえ」と律ちゃんは素直に感心してくれた。

「文学をやるために東京に来て、本当に物にするんだから」

「わたしは全然。兄や伊藤さんのおかげだし、稿料をもらっているわけでもないから」

そうはいつても、多少は進歩した姿を故郷の友人に見せられたのは誇らしかった。律ちゃんは「負けてられないな」と雑誌を閉じた。

「それで、あの人とはどうなったの？」

「えっ？」ととぼけると、律ちゃんはにやりと笑った。

「伊藤さん。いまでも仲良くしてるの？」

あえてすぐには答えず、「まあ、まあ」とごまかした。

「向こうのアパートには、よく通っているけれど」

「交際してるってこと？」

「そういうわけじゃないの。翻訳を教えてもらっているだけ。あつちは妹としか思っていないから」

口ではそう言いながら、意味深長な笑みを浮かべることも忘れなかった。東京に来てから覚えた笑みのつくり方だった。律ちゃんは「ふうん」と疑わしそうにわたしを見ている。まだまだ話せるが、そろそろ家を出る時刻だ。きょうは百田さんの家で初鯉はつがっおをごちそうになる約束だった。

「また話しましょう。これから毎日会えるんだし」

「そうね」

律ちゃんはあると解放してくれた。やはり疲れが溜まっていたのか、立ち去ろうとすると、壁にもたれかかって手を振った。余市の通学列車で見たときよりも、律ちゃんの姿は小さく思えた。

夏の夜に響くのは、ペンの先端が紙をなぞる音だった。

部屋でひとりきり、わたしは座卓に向かっている。ひと文字ずつ、彫りこむように原稿用紙を埋める。

久しぶりに自作の詩を書こう、と思ったのは、伊藤さんのひと言がきっかけだった。いつものように和田堀町のアパートで翻訳の指導を受けていると、煙草を吸いながら伊藤さんが言った。

——ちかちゃんは、まだ詩を書けないからね。

このところ、伊藤さんはあからさまな皮肉を口にするようになった。

——書けないんじゃないんです。

——だとしても、実作しない人がぼくの詩を云々言うのはどうだろう。

要するに、伊藤さんが言いたいのはそこだった。所詮、一編の自作詩も発表していないわたしには、彼の詩を論評する権利はないのだと。子どもじみた指摘だったが、その、子どもじみた部分をさらけ出してくれることが好ましかった。

——なら、書いて差し上げます。

伊藤さんは答えず、口の片方だけで笑っていた。そこには、隠そうとしても隠しきれない悔あなごりが滲んでいた。

久しぶりの詩作はすんなりとはいかなかった。一行書いては消し、三行書いたところで立ち止まった。一語付け足すかどうか迷い抜き、

足そうと決めた後で、全体の風貌ふうぼうががらりと変化することに気付く。頭から書き直し、やはり足したのは失敗だったと判断し、ずっと前の地点に戻って出発し直す。気がおかしくなるくらいもどかしい作業を積み重ね、徐々に、本当に徐々に、完成に近づいていった。

もともと自分の詩に絶対の自信を持っているわけではない。完成した末に誰かから褒められるとも思っていない。ただ、あの人を驚かせてやりたいという、その一念でペンを動かしていた。原稿用紙を破り捨てたい衝動に駆られるたび、伊藤さんの驚く顔を想像して、気持ちしずを鎮めた。

畳の上には伊藤さんの署名が入った『雪明りの路』を置いている。開かれたページに記されているのは、〈私は甲虫〉だった。以前、律ちゃんぼんようが気に入りだと言った一編。わたしには凡庸ぼんようにしか思えない一編。わたしは、伊藤さんの詩と対になる作品を書きたかった。現実で夫婦めおとになれないなら、せめて詩だけでも夫婦になりたかった。

元になる作品として〈私は甲虫〉を選んだのは、凡庸だからこそだった。私の視界には、伊藤さんのあの侮るような笑みがこびりついている。その笑みには、私が伊藤さんを超えられるはずがない、という傲慢ごうまんさが滲んでいた。その傲慢さに少しでも傷をつけてやりたかった。打ちのめすのは無理でも、せめて同じくらいもののは作れる、ということを見せせてやりたかった。だから傑作ではなく凡作を選

んだ。

詩を書きながら、わたしは昆虫になっていた。体表を鈍く美しく輝かせながら、無数の虫たちが地を這^はっている。わたしはそれらを統^すべる一個の意識だった。同時にわたしは、夜の孤独で眠る女だった。群衆の目を逃れ、買い求めた衣服を脱ぎ捨て、誰も知らない顔で机に向かう。身体の内部は熱く、表面は驚くほど冷たかった。

数日を費やして書き直したおかげか、ようやく満足できる形に整ってきた。新しい原稿用紙に清書すると、それだけで少しはまともに見えた。

昆虫が電流のやうな速度で繁殖した。

地殻の腫物^{はれもの}をなめつくした。

美しい衣裳を裏返へして、都会の夜は女のやうに眠った。

私はいま痣^{あざ}を乾す。

鱗のやうな皮膚は金属のやうに冷たいのである。

顔半面を塗りつぶしたこの秘密をたれもしつてはるないのだ。

夜は、盗まれた表情を自由に廻転さす痣のある女を有頂天にする。

できあがったのは、伊藤さんの詩とは似ても似つかない代物だった。『雪明りの路』に似せて書くという選択肢もあったけれど、底なしに失礼な気がして、どうしてもできなかつた。果たしてこれをまともな詩と呼べるのだろうか。判断はつかないが、開き直るしかない。わたしにはこれしか書けないのだから。

完成した詩に、わたしは〈昆虫〉という題を与えた。

われに返って時計を見やると、午前一時を過ぎていた。この家には、兄を頼って多くの下宿人が暮らしている。それなのに、どれだけ耳をすましても呼吸ひとつ聞こえない。

部屋にひとつだけある窓を、静かに開けた。風が湿気た空気を追い払ってくれ、少しだけ涼しくなった。蚊帳かやは使っていない。夏の余市に比べれば、東京には虫はいないも同然だった。

夜は死に近い。だから好きだった。短い小指が、夜と共鳴していた。

卓上の照明に引き寄せられたのか、爪くらの大きさの羽虫が一匹、室内に飛んできた。節くれだったからだに透きとおる翅はね。畳の上で休んだそれは、カゲロウだった。余市でも、何度か見たことがあった。

——カゲロウの成虫は、一日二日で死んでしまうんだよ。

教えてくれたのは伊藤さんだった。たしか、イチゴが熟した初夏だった。埃っぽい果樹園で、耳元にそとささやいてくれた。あのときも、目の前を薄羽のカゲロウが横切っていた——。

そう考えて、ふと、自分の記憶が疑わしくなった。本当にそうだっただろうか。どうしてあの人がそんなことを知っていたのか。わたしは勝手に、伊藤さんとの思い出を増やそうとしてはいけないか。

真剣に思い出そうとしたけれど、耳に蘇よみがえるのは、あの低い声だけだった。

耳の横で、心臓がどンドン鳴っている。

いつもの朗らかさが嘘のように、百田ももたさんは難しい顔をしていた。原稿用紙をめくりながら、わたしの短い詩を幾度も読んでいた。奥様はいない。通いなれた和室には、わたしと百田さんの吐息が充満していた。開け放した板戸の向こうにある庭で、低木が青々と茂っていた。

「……どうですか」

訊くまいとしていたのに、耐えかねた質問が口から転げ出た。百田さんは目だけを動かしてこちらを見る。

「これ、いつ書いたん？」

「数日かかりましたけど、書き上げたのは一昨日おとといの夜です」

「なるほど」と言つて、百田さんはまた黙りこんだ。

最初に百田さんに見せようと決めたのは、知り合いのなかで最も文学への造詣ぞうけいが深い人だからだ。〈椎の木〉の主宰であり、みずからも詩の名手である百田さんなら、きつと適切な評価を下してくれる——というのは言い訳で、本当は伊藤さんに見せる勇気がなかったからだ。もし伊藤さんに嘲笑ちやうされたり、呆あれられたりしたら、文学をやつていく覚悟むしよなんて霧消むしよしてしまうだろう。

百田さんはたつぷりと時間をおいてから、「ちかちゃん」と言った。「誇るわけやないけど、これまでぎょうさん詩を読んできた。雑誌の編集にかかわった詩だけでゆうに千はある。うまいんも、下手くそなんもあつた。数だけなら並の詩人にはまず負けへんつもりや」

話の行き先がわからず、はあ、と曖昧あいまいな返事しかできなかった。百田さんは丁寧な手つきで原稿をそろえた。

「そのうえで言うけど、この〈昆虫〉みたいな詩は読んだ記憶がない。強しいていえば海外の前衛詩が近いけど、それとも少しちゃう。つまり」

緊張が頂点に達し、全身が耳になった。庭では梢こずえがざわめいていた。

「この詩は、まったく新しい現代詩や」

わたしには、その評の意味がわかりかねた。喜んでいいのか、悲しむべきなのかわからなかった。喉はからからなままだった。

「それは……」

焦れたように、百田さんは「傑作や」と断言した。口髭が細かく震えている。

「ちかちゃん。きみには詩の才能がある」

「……わたしに、ですか？」

「ひいきで言うてるんやない。間違いなく、この詩には新しさがあ
る。発表すれば、ぼくの評価が正しいとすぐにわかる」

言葉がじんわりと、遅れて頭のなかに染み入ってきた。だんだんと頬が熱くなり、目を見るのが恥ずかしくてうつぶいた。百田さんほどの一角の詩人が、よりによって詩に関して、すいきょう酔狂で人を褒めるとは思えない。

「そんな、詩の才能なんて」

「疑うんやったら、他の人にも訊いてみたらええ。川崎くんや伊藤くんには？」

「まだ見せていません」

「びっくりするで。こんな詩、読んだことない」

称賛の言葉を浴びるほど、疑心が頭をもたげた。これまでずっとひとりで詩を書いてきた。伊藤さんのように詩を書けないことが、

恥ずかしかった。そのわたしに、詩の才能がある？

「でも、こんなの詩と呼んでいいんですか。雑誌に載っている詩とは、違う文章のように思うんですけど」

「ちやうからええんや。同じもんばっかり書いたってしゃあない」

百田さんは、一度下した評価を微塵みじんも譲らなかつた。この詩は新しい現代詩や。ちかちゃんには才能がある。そのふた言を、しつづられた九官鳥のように繰り返していた。折れない百田さんを見ているうち、わたしもその気になってきた。

「とりあえず、誰かに読んでもらいます」

「それがええわ。新作書いたら、また見して。ぼくの雑誌やったらいつでも掲載するから」

真剣な口ぶりから、ただの世辞ではないと知れた。心のなかで先刻の言葉を反芻はんすうする。

——きみには詩の才能がある。

ずっと、ずっと、心から待ち望んでいた言葉だった。わたしは選ばれた。少なくとも百田宗治は、わたしの才を認めてくれた。

感謝を述べて辞去しようとする、「ちよっと待って」と引き止められた。

「ぼくもちかちゃんに話したいことあるんや」

浮かせかけた腰を下ろすと、百田さんは正座になって咳ばらいを

した。

はぎわらさくたろう
「萩原朔太郎って、聞いたことあるやろ」

「それはもちろん」

東京で詩をやっている、萩原朔太郎の名を知らない人はいないだろう。詩壇の大物であり、昨年設立された詩人協会の評議員も務めている。詩集は読んだことがないが、雑誌で何度かその文章には目を通したことがあった。

「ぼくは『日本詩人』の編集やなんやで、萩原さんとは古い仲間やけどね。歳は、四十をなんぼか過ぎたところかな。たまに余計な喧嘩けんかをすることもあるけど、人柄はぼくが保証する」

それから百田さんは、急に渋面じゆうめんをつくった。

「その萩原さんの細君さいくんがね、ちよつと奔放ほんほうな人でね。まあ、若い学生と関係を持ってもうて、それが一帯に知られたんやな。娘さんもふたりおるし、萩原さんとしても見過ごせん、と。そこで近々離婚に踏み切る決意をしたらしいんやけどね。本人は故郷に戻って娘たちを育てると言うてるんやけど、やっぱり東京で相応の女性と家庭を持つべきやと、ぼくは思うわけや」

話の行方が見えない。黙って耳を傾けていると、百田さんはぴしやりと膝を叩いた。

「ぼくはな、萩原さんにはちかちゃんが似合いやと、前から思っ

たんや」

「……はい？」

咄然あぜんとした。なにを言われているのか、わからない。萩原さんには会ったことすらなかった。その会ったこともない相手と、夫婦になれということだろうか。わたしには詩の才がある。ついさっき、そう言ったばかりではないか。

家庭に入るということは、詩をやめることとほぼ同義だった。ごく一部の例外を除いて、妻や母となった女性が詩を書いているという話は、聞いたことがなかった。萩原さんに限らず、男の人と結婚するということはそういうことだ。視界が狭まり、問い直そうとした舌がもつれた。

わたしの表情からなにかを感じ取ったのか、百田さんは「まあまあ」と手のひらを上下させた。

「唐突にこんなこと言われて、びっくりするんは無理もない。ただ、萩原さんの妻は誰でも務まるわけやない。ちかちゃんみたいに教養があつて利発な女性なら、きっと家庭も落ち着きを取り戻すと思うんや。ぼくはね、さっきの詩を読んで確信した。ちかちゃんなら、きっと萩原さんとうまくやれる」

うごめく口髭を見ながら、わたしの頭にはいくつもの疑問が浮かんでいた。萩原さんの都合の前に、わたしの気持ちはどう考えてい

るのか？ 萩原さんは「家庭に落ち着きを取り戻す」ために結婚するの
のか？ わたしの詩と、結婚のあいだにどんな関係があるのか？
なにもかもが、わからなかった。

わたしは、ペンを捨てたわたしを想像する。よき妻として炊事や裁縫にいそしみ、文学をやっていたことなどおくびにも出さず近所付き合いをこなす姿を。それは空虚と呼ぶしかない情景だった。死体が服を着て動いているようだった。こみあげた吐き気を唾と一緒に飲み下した。

百田さんの舌はまだ動いている。

「どんな男かもわからないのに結婚せえとは言わん。向こうもまだ離婚は成立してへんし。ともかく、いつペン萩原さんと会ってみるんはどうやろう。男女としてというより、お互い詩を書く人間として」

詩人としての萩原朔太郎に、興味がないといえば嘘になる。だが、彼と会うことが夫婦としての暮らしの第一歩だというのなら、話は別だ。

わたしはできるだけしおらしい声で、「すみません」と頭を下げた。

「兄に相談しないと、なんともお答えできません」

都合よく兄を使っている、という自覚はあった。実際のところ、わたしの意思と兄の意見は別問題だ。ただ、体よく回答を保留するに
は、こう答えるのがもつとも角が立たないように思われた。百田さ

んは「もちろん」とうなずいた。

「川崎くんにはぼくから話しとくつもりや。ただ、ちかちゃん本人には先に言うときたかったんよ。お兄さん伝いに聞いても、ええ気はせんやろなと思って」

「お気遣い、ありがとうございます」

再度、頭を下げた。

百田さんのことは尊敬している。詩人として一家をなし、後進の面倒も見ている。わたし自身、夫妻にはさんざんかわいがってもらっている。だからといって、藪から棒に持ちかけられた縁談に「はい」と即答はできなかった。

ただ――。

この話を聞いた伊藤さんの顔を想像すると、暗い^{よろこ}歓びが胸を覆った。

玄関横の姿見で、ブラウスの襟を直した。

廊下を進み、突き当たりのドアの前に立つ。ノックは三度。返事はなかった。それでも構わず、ドアを押し開ける。伊藤さんは座卓に肘をついて、葉書になにかを書きつけていた。

「こんばんは」

「悪いけど、これを書き終わるまで待っててくれる？」

伊藤さんは顔を上げず、手を動かしたまま言った。わたしは積まれた書物のあいだに腰を下ろし、おとなしく待つことにした。引き出しの中身をひっくり返したのか、あたりには書簡が散らばっていた。〈文芸レビュ〉の編集に携わる伊藤さんは、たまにこうして過去の手紙類をあさっている。

手元に落ちていた封筒には、細く丸い線で〈伊藤整〉と記されていた。女性の字だとすぐにわかった。裏面には新潟県の住所と女性の名が記されている。伊藤さんはいまだ、葉書にちまちまと字を書きこんでいる。わたしはできるだけだけ音を立てないよう、封筒から便箋を引っ張り出した。

一読して、女性と伊藤さんとの文通はこれが最初ではないとわかった。文面から察するに、『雪明りの路』がきっかけらしい。だとしたら一年、あるいはそれ以上やり取りが続いているかもしれない。女性が伊藤さんに好意を持っていることはあきらみかだった。会いたい、というひと言を見つけた瞬間、爪が白くなるくらい指先に力がかもった。

「なにを読んてる？」

声のしたほうを見ると、伊藤さんがわたしをにらんでいた。

「ここに落ちていたので、読んでいいのかと」

「すぐにしまってください」

便箋をたたんで封筒に戻し、その場には置かず、あえて手渡した。

「この女性って、どんな方？」

「まだ会ったことはない」

「いつ会うの？ 新潟まで会いに行くんですか？」

「どうだろうね」

「この方とお付き合いするんですか？」

伊藤さんはまだペンを持っていたが、観念したように卓上に置いた。

「あら、葉書は？」

「きみが止めさせたんだろ。彼女は女友達のひとりに過ぎない」

「どうだか」

実際、あの手紙は友人同士の便りには読めなかった。どう読んでも乙女の恋文だ。仮に、ふたりが相応の文通をしているのであれば、彼女の恋心に気付いていないはずがない。そのうえで伊藤さんは、その恋心を鎮火するどころか盛んに焚きつけたのだ。下心が皆無であるはずがなかった。

「たくさん女友達がいらっしゃるのねえ」

伊藤さんが反論らしきことを口にする前に、「そうそう」と続ける。

「縁談があったの」

「きみに？」

「他に誰がいるんです。相手はね、萩原朔太郎さん」

ええっ、と伊藤さんが首をかしげた。胸のうちでくすくす笑う。

「なぜ、萩原先生と？」

「百田さんから勧められたんです。もうすぐ離婚なさるそうですよ、萩原さん。百田さん、わたしと萩原さんが似合いだと、ずうっと思っていたんですって。どうしたらいいんでしょう」

「昇はなんて？」

「わたしの結婚なのに、どうして兄が出てくるんです？」

伊藤さんは、ニシンの内臓を頬張ったような顔をする。実際、百田さんが話すと言っていたから、わたしから兄には話していなかった。

「どう思われました？」

「……どうもない」

「わたしは妹同然なんでしょう。だったら祝福してください。詩壇の大物との縁談なんて、そうそう持ち上がることではないんですから」

無表情の裏に動揺を隠した伊藤さんを見ると、愉快で仕方なかった。「おめでどう」という抑揚よくようのない声が、室内に溶けた。

「それは？」

視線で示されたのは、わたしの膝の上にある〈文芸レビュー〉の印が捺おされた封筒だった。兄に見つかったら、社用の封筒を勝手に使

うな、と叱られるだろう。

「詩を書いたんです。伊藤さんに読んでほしくって」

「自作の詩を？ めずらしいね」

「もし出来がよかったら、〈文芸レビュー〉に載せてくださいませんか」

「むしろ、良い詩なら大歓迎だよ」

余裕が垣間見えるよう、ゆっくりと〈昆虫〉の原稿用紙を取り出し、卓上に置いた。

最初、伊藤さんは紙を左手で持っていた。けれどすぐに顔色が変わった。卓上に隙間をつくり、そこに紙を置いてじっくりと読みはじめた。待っているあいだ、思いつくかぎりの言葉で自分を鼓舞こぶした。大丈夫。百田さんは詩の才があると断じてくれた。きっと伊藤さんも褒めてくれる。

詩を読んだ伊藤さんは、「ちかちゃん」といぶかしげに目を細めた。

「……この詩は、本当にきみが書いたのか？」

「はい？」と問い返すしかなかった。意味がわからなかったから。

「詩を書いた、と言ったじゃないですか」

「誰かの作品を代筆したわけではないんだね？」

「どうしてそう思うんです？」

「いや、うん、悪い」

見るからに、伊藤さんは正気を失っていた。ランプに照らされる横顔は青白く、目の縁が赤く染まっている。沈黙を埋めたくて、口を開く。

「この詩を書けたのは伊藤さんのおかげなんです。(私は甲虫)から着想したんです」

伊藤さんは頬を歪め、下唇を突き出した。内心を読み取るため、その表情を凝視する。不快。いや、恐怖か。伊藤さんはこの詩に恐怖している。でもなぜ？ わたしの詩が上出来なら褒めればいいし、不出来ならけなせばいい。なのに、なぜ恐怖を？ 立ち上がり、伊藤さんの真横に移った。

「どうですか、この詩」

「ああ、うん……もう誰かに読ませた？」

「百田さんには」

「なんて言ってた？」

「まったく新しい現代詩だと」

呆けたように、伊藤さんの顔から力が抜けた。恐怖心がなくなった顔からは、諦めの感情しか読み取れなかった。「なんだ」という突き放すようなつぶやきが静寂に落ちた。

「答えはもう、出てるじゃないか」

問い直そうとしたけれど、宙を見つめる目があまりにも虚ろでな

にも言えなかった。伊藤さんの体内は、空っぽさで一杯だった。指一本でも触れれば破裂してしまいそうなほど、張りつめていた。

やがて、伊藤さんは原稿をわたしに突き返した。感想を求めないのもおかしいように思えて、「どうでしたか」と尋ねた。答えは短かった。

「〈文芸レビュー〉には載せられない」

どすっ、と矢が胸に突き立てられる音がした。拒絶という名の矢は鋭く、引き抜こうとしても簡単には抜けなかった。呼吸が苦しくなり、喘ぐように伊藤さんの腕をつかんだ。

「下手だったんですか」

「そんなことは言っていない」

「なら、どうして」

「頼る人なら昇なり百田さんなり、いくらでもいるだろう。とにかく〈文芸レビュー〉は駄目だ。あれはぼくが編集している雑誌だ。許はできない」

伊藤さんはわたしの腕を振りほどき、右手で激しく頭皮を掻いた。突然余市の家を訪ねてきた、あの日と同じように。幾本か髪が抜けて、指にからまっていた。

「ひとりにしてほしい。出ていってくれ」

こちらを一瞥もせず、そう言い放った。だからといって、すんなり

と退出するわけにはいかない。このまま置いていくのは心配だった。座卓が揺れ、伊藤さんの膝に原稿用紙が落ちた。拾い上げようと這いつくばったところで、「やめろ！」という怒声が飛んできた。振り返ると、赤黒く充血した鬼面きめんがわたしを見ていた。

「出ていけ！ 今すぐに！」

動物の吠え声のようだった。わたしは首をすくめ、封筒をひっつかんで、小走りに部屋から逃げるしかなかった。

アパートを出て少し歩いた街灯の下で、たまらなくなっしてしゃがみこんだ。固く閉じた瞼から涙がこぼれた。くしゃくしゃになるのも構わず、封筒を抱きしめた。通行人がいないのをいいことに、夜の底で思う存分おえつ嗚咽した。ブラウスの半袖に顔を押し当てると、ぐっしよりと濡れた。

どうして、こんなことになるのだろう。

どうして、わたしは受け入れてもらえないのだろう。

いい詩だね、と褒めてほしかった。伊藤さんや兄の仲間になりたかった。ただそれだけなのに、百田さんは怖いくらいに絶賛し、伊藤さんは獣けもののように激怒した。わたしの詩は、いったいなんなのだろう。これ以上、誰にも見せたくなかった。

両手で封筒の端と端をつかんだ。このまま左右の腕を動かせば、封筒ごと原稿を引き裂くことができる。街灯が黒々とした影を地面

に落としている。影は微動だにしないまま、一分が経ち、二分が経った。

はあ、と息を吐くと、力が抜けた。右手につかまれた封筒は皺だらけだったが、破れてはいなかった。思い足を引きずって歩く。

いつか時期が来るまで、この詩は封印する。誰にも見せず、襖の奥にでもしまっておくのだ。平穏な日々を送るために。

——顔半面を塗りつぶしたこの秘密をたれもしつてはあないのだ。よぎった〈昆虫〉の一節に、少しだけ口元が緩んだ。

わたしが詩を書いていることは、わたしだけが知っていればいい。夜は女の顔を隠してくれる。

誰も知らなくとも、わたしはたしかに詩人だった。

〈つづく〉